

令和 6 年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

視点	4年間の目標 (令和6年度策 定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月24日実施)	総合評価(3月31日実施)		
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等	
1	教育課程 学習指導	<p>①生徒一人ひとりの確かな学力の向上を図り、進路実現に向けた支援を推進する。</p> <p>②国際理解教育等を通して、生徒一人ひとりの自立に向けて、視野を広げ豊かな人間性と社会性を育成する。</p>	<p>①生徒の学力向上に資するため学習環境の整備を行う。また、生徒が主体的に学ぶ意欲を高めるとともに、生徒の深い学びの実現を図る。</p> <p>②姉妹校交流や留学生との交流などの教育活動を通して、生徒一人ひとりが主体的に取り組める機会を与える、その企画の推進に努める。</p>	<p>①(1) ICT 機器の利活用の促進を行うなど、多様な学習機会を提供し、生徒が自ら学習する意欲の向上を図る。</p> <p>(2)組織的な授業改善の推進を継続する。</p> <p>(3)生徒による授業評価の向上に繋がったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育課程の検討が進んだか。 <p>②姉妹校交流等の交流活動において、生徒の主体的な活動を引き出し、相手校の生徒と共に意義深い経験となるよう取り組む。</p>	<p>①(1) ICT 機器の学習環境の整備が進んだか。</p> <p>(2)生徒の学習意欲の向上について、授業評価のうちの自己評価の項目において2/3程度以上の生徒がプラスに評価したか。</p> <p>(3)新カリキュラムマネジメントの視点に基づいた教育課程の実施および見直しに努める。</p> <p>②生徒が主体的に取り組める場面や活動満足度がアンケートを通して上がったか。</p>	<p>①令和4年度より導入されていた一人一台端末が、今年度全学年に導入された。その活用のためのアプリケーション「ロイロノート」についても全学年で利活用された。これにより、授業を担当する多くの教員が有効活用できたことで、教員の授業力向上と生徒の授業への積極的な参加につながった。</p> <p>また、今年度より各教室に大型電子黒板が配備され、他のICT機器との活用と合わせて効果的、効率的に授業が行われた。</p> <p>新カリキュラムとなって3年(1周)が経過し、今年度さらなる改善に向けて検討した結果、令和8年度からの教育課程が完成した。</p> <p>②水原外国語高校が来校し、歓迎会および茶道体験し本校の生徒宅にホームステイをした。グアムのセントポールクリスチヤン高校を訪問し授業参加、交流会が行われた。また今年度よりオーストラリア訪問が9日間実施された。いずれも事前研修として英語による日本紹介のプレゼンテーションを準備や外部講師を招いて英会話の練習を行い、各自が目標をもって取り組んだ。帰国後は全員が英語でレポートを作成した。同年代の生徒やホストファミリーとの交流を通して異文化理解を深め、さらなる英語力向上等、新たな目標を持つ一助となった。</p>	<p>①今年度、全学年で一人一台端末が導入され、大型電子黒板も各教室に配備されたことから、より多くの職員への研修を実施して、これらを利活用した授業技術はもとより、授業内容や生徒への問い合わせなどのソフト面を含めたさらなる授業力向上に努める。</p> <p>また、生徒支援Gと連携し、生徒の情報リテラシーの向上を図る。</p> <p>②今後も生徒が主体的に取り組むことができる環境を整え、国際理解教育の推進に努める。</p>	<p>①大学に入学していく学生のICTスキル向上を実感しており、高等学校での取組の成果と考えている。</p> <p>①電子黒板で提示、共有したデータ等は生徒たちに共有されるのであれば生徒のノート作成にも活用できる。</p> <p>②中学校では授業におけるICT(デジタル)とアナログのバランスを見直し始めている。</p> <p>①中学では「学習者中心の学び」の実践を目指しているが、「高校入試に対応した学び」とのバランスにも苦慮している。高校でも同様な状況にあることがわかった。</p>	<p>①ICTを活用するにあたって「教員がどう教えるか」「教員がどのような教材を選ぶか」「生徒にはどう見えているか」という視点を持って授業改善を行う。</p> <p>②台湾修学旅行や姉妹校交流等の活動において、生徒の主体的な活動を引き出し、相手校の生徒と共に意義深い経験となつた。</p>	<p>①ICT活用を継続するとともに、研修や授業互見等によって組織的授業改善に引き続き取り組む。</p> <p>②引き続き生徒が主体的に取り組むことができる環境を整え、国際理解教育の推進を図る。</p>
2	生徒指導・ 支援	<p>①生徒のさまざまな活動の主体性を尊重し、生徒に向き合って、リーダーシップを育成する。</p> <p>②生徒一人ひとりの個に応じた支援体制を定着させる。</p>	<p>①生徒組織それぞれの自主的・主体的な運営を促すとともに責任を持たせ、有意義な活動と達成感の向上を目指して、適切な指導と助言を行う。</p> <p>②生徒のメンタル面での変化を早期にとらえ、適切かつ丁寧な対応を行う。</p>	<p>①生徒会本部及び各種委員会がそれぞれ課題を認識し目標を立て、協力しながら達成に向けた活動が行われるよう支援する。また、部活動が達成感と育ちあいの生まれる場となり、それが安全な環境で行われるために、支援と環境整備を行う。</p> <p>②生徒への声かけを日常的に行い、生徒の変化の早期発見に努め、学年</p>	<p>①各種活動や行事において、生徒による総括や、生徒アンケートで活動満足度が上がったか。</p> <p>②かながわ子どもサポートドックおよび学校生活アンケートを有効活用しながら</p>	<p>①アンケート結果によると行事に対する満足度はかなり高かった。特に文化祭は、食販を復活させ前年度より2ポイントの上昇がみられた。（とても良い、良いがR5: 97.8%→R6: 99.6%）前年度に引き続き、生徒会執行部や実行委員等とのやり取りを丁寧に行っていることも高い満足度を維持できている要因かと思われる。また、部活動についても、利用頻度が高まっているトレーニングルームの器具の充実をはかった。</p> <p>②教育相談の支援状況としてはSCに繋げた生徒は71(87)名【R5年度141(52)名】SSWに繋げた生徒は23(77)名【R5年度53(45)名】であり、ともに通常面談が減少し、プッシュ型面談が増加した。（）内はサポートドッグによるプッシュ型面談数。かながわ子どもサポートドック及び学校生活アンケートの実施回数を整備し、アンケ</p>	<p>①本校の行事は満足度や達成感は高いが、教員生徒双方とも負担は大きく、引き続き、行事規模の適正化及び持続可能な行事のあり方と伝統の継承とのバランスを考慮して、検討を続ける必要がある。</p> <p>②通常面談を受ける生徒がプッシュ型面談を受けることで昨年度より通常面談を受ける人数が減ったが、継続的に面談を受けている生徒や、アンケート時に問題はなかったが、新たに通常面談を受けたい生徒の時間が確保できないことがあった。また、プッシュ型面談を受けた生徒の継続的な支援が充分に行えなかつた。これらの改善策は、本校のように生徒数が多い学校に対しては、SC、SSW</p>	<p>①アンケート結果で学校生活への満足度が高い生徒が多数いるのはわかった。一方で満足度の低い生徒への対応はどうしているのか。</p> <p>②サポートドックの取組による成果が出ているとのことだが、大学でも課題を抱える学生がいる。高校のように担任制ではないことやSCとSSWの2名体制ではないことなどもあり苦慮している。</p> <p>②生徒のSNS利用</p>	<p>①体育祭、文化祭、合唱祭を軸にした本校の行事については、行事規模の適正化及び持続可能な行事のあり方と伝統の継承とのバランスを考慮して引き続き見直しをすすめていきたい。</p> <p>②サポートドック及びSCやSSWとの面談、教育相</p>	<p>①学校行事について他校の状況についての情報収集を継続するとともに、事後アンケートも参考にしながら検討を継続する。</p> <p>②教育相談体制は充実しているが、引き続き見直しを行う。</p>

視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月24日実施)	総合評価(3月31日実施)		
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等	
			会や教育相談コーディネーター会議、ケース会議を活用して教員間で生徒情報の共有を図り、チームによるきめ細かな支援を行う。	生徒のメンタル面での変化を早期にとらえ、適切な対応を行うことができたか。	一ト実施後のSC、SSWによるプッシュ型面談の期間を充分に設けたことで、プッシュ型面談を受けた生徒が増え、支援を必要とする生徒へ早期に適切な対応をとることができた。	の勤務日や、人数を増やす等の要望を引き続きしていく。	に係る課題について対応できる支援体制確立についても検討をすすめてほしい。	談コーディネーター会議、ケース会議等による支援体制を引き続き充実させたい。		
3	進路指導・支援	キャリア教育を充実させ、目的意識を持って学習に取り組む姿勢を育む。	生徒自身が希望する進路について考え方で判断する力を育めるよう、3年間を通して必要かつ適切な支援を行う。	3カ年を通じてキャリア教育ガイドブックの活用、外部テストの受験・新しい入試制度の分析などを行い、系統的な進路指導を行う。	各学年予定通り、それぞれの時期に応じた各種説明会を開催し、生徒の進路選択に有意義な情報提供を行えた。特に新課程入試の1年目ということで、3年生については、各入試制度の概要や出願条件等の情報を適切に提供できた。開室2年目となる自習室の利用について、3年生を中心に多くの生徒が積極的に活用していた。	新課程入試のスタートに伴い、入試の概要や出願条件等に変化が一部見られた。今後も情報収集と共有を徹底していきたい。また、年内入試（学校推薦型選抜・総合型選抜）に向けて、1年時より小論文の対策等を充実させたい。自習室について、さらに使いやすくなるよう、環境整備を行いたい。	・進路実績が徐々に向上しているようである。キャリア教育プログラムの見直しやICTの活用による授業力向上及び授業内容の充実が大学受験にもつながっていることがわかった。	・生徒が希望する進路の実現に向けた取組を充実させてきており、国公立や早慶上智、立教等への進学も増えた。	・引き続きキャリア教育プログラムの充実に努める。	
4	地域等との協働	地域等への貢献活動や教育力の活用を通して、地域に信頼される学校づくりを推進する。	地域に貢献できる教育活動の充実を図る。	①地域貢献活動について、生徒の意見を取り入れる等、主体的な活動となるよう検討や工夫を行う。 ②防災訓練や地域理解活動を通じて、地域との交流を深め、地域防災について連携をさらに深める。	①地域貢献活動について、生徒の主体的な活動となるよう検討や工夫したか。 ②防災教育において具体的な地域理解及び体制づくりができたか。	①地域貢献活動については自治会の夏祭りなどの運営面での協力を図ることができた。生徒会や吹奏楽部やチアダンス部、ボランティア部など多くの部活動などが協力し、様々な場面で積極的な活動が図れた。 ②1学年の4月に、津波のシミュレーショントレーニングやDIG研修を実施、近隣の広域避難場所及び避難経路の確認、また鎌倉市の津波避難ビルや広域避難場所について調べ、実際に場所の確認を行う学習を実施するなど防災についての意識を高めるとともに地域理解に努めた。 また避難訓練や防災委員会による喫食訓練などを実施した。	①引き続き地域貢献活動における生徒の主体的な取り組みを推進していくとともに、地域の様々な行事や活動に対して、地域のために生徒たちの若い力を發揮できる場や環境の整備に努める。 ②地域と協力した防災活動の取り組みについては今年度も実施できなかったので、次年度については連絡体制を構築し、防災での交流も図れるように努める。	・地域の夏祭りには100名を超える生徒が参加してくれ、そのような取組に感謝している。 ・例年11月に七里ガ浜小学校で4地区連合の防災訓練を実施している。それに向けた取組をはじめはいかがか。	①地域のイベント参加については、ボランティア部、吹奏楽部、ダンス部、チアリーディング部、茶道部等多くの部等による参加があった。 ②地域防災にも取り組んでいきたい。	②例年11月に行われている七里ガ浜小学校での4地区連合の防災訓練への参加に向けた取組をすすめる。
5	学校管理 学校運営	①安心・安全な教育環境の整備に努めるなど、教育課題に対して積極的に取り組むとともに、学校の取り組みの情報発信に努める。 ②教員の働き方改革を推進し、組織的な学校運営と校務の効率化を図る。	①継続した生徒の学習活動の整備・充実に努めるとともに、社会で必要とされる学校となるよう職員・生徒の意識向上を図る。 ②働きやすい職場づくりのための職場環境を整える。	①清掃分担の計画を立て、生徒環境整備委員や技能技員、PTAと協力・連携して、校内美化やゴミの減量化及び資源化に努める。 ②業務に対するストレスが軽減されるよう、業務分担・内容の見直しを行う。	①生徒アンケートで校内美化に対する意識や取組が向上したか。 ②ストレスチェックで高ストレス者の割合が15%未満であったか。	①計画的に大掃除を実施した。またオフィス改善事業に伴い、学びやすい・働きやすい職場環境の整備を目指し、産業廃棄物廃棄のためのコンテナを定期的に設置するなど、校内美化活動を積極的に行なった。 またPTAの協力のもと校内における汚れた壁のペンキ塗りを行い、50周年に向けての校内整備を推し進めた。 ②ストレスチェックでの高ストレス者の割合が15%未満ではなかった。 またストレスチェックの受検率が低かった。	①生徒へのアンケートについて、継続的に実施することができなかつた。次年度に向けて、振り返り方法について検討し、校内美化に向けてさらなる意識付けの強化を図る。 ②ストレスチェックの受検率の改善を図り、職場全体の正確なストレス状況を把握できるように実施の方法を検討し、改善を図りたい。 また、全体の業務量が減少しても、特定の人に対して業務が集中する状況があるため、内容を整理するとともに分担の見直しも継続する。	①長寿命化工事やオフィス改善事業、50周年記念行事等に向けた取組を行うことができた。 ②ストレスチェックについても受検率が低かった。	②ストレスチェック受検率の向上に向けた取組をすすめる。	